

生き物の立場になって考えようとする 名古屋市立第二幼稚園（愛知県名古屋市）

[4 歳児]

事例 ゼニガメの死から考える

カメを大切に思う気持ちをもってほしいという願いから「バタバタして困ってるよ」「怖いよって思ってるんじゃない?」と、乱暴に扱う幼児にその都度声をかけてきた。しかし、その瞬間は手をひっこめるのだが、教師の見ていないところでカメを持って遊んだり、水槽に砂や石を入れたりする姿がその後も見られた。

我慢

ある日、教師がカメの水槽を覗くと一匹のカメが動かなくなっていた。

友達の中で、様々な立場に立つ

クラスみんなで集まった時間の『お昼（お帰り）のニュース』で、その日はカメの水槽を保育室の中に持ってきて幼児たちに話をすることにした。

自分のしたことを振り返る

「カメの死」を知った幼児たちは、興味本位で「見せて」「どれ?」と死んでしまったカメを見てみたいという思いで水槽に集まった。しかし白い綿のようなものを出して水中に浮いているカメをまのあたりにすると、興味本位だった幼児たちもはっとした表情になった。

自分に照らし合わせて考える

「A君この子たちって親子だったのかな?」とゼニガメをもってきたA児に聞くと「違う、この3匹は兄弟だったんだ、お母さんとお父さんと離れて暮らしているんだ。人間も大きくなると一人で暮らすでしょ」と、一生懸命答える。



カメを気遣う

「そっかあ、お兄ちゃんかなお姉ちゃんかな、妹かもしれないね、死んじゃって悲しいだろうね。違うところにいるお父さん、お母さんもとっても悲しいよね」と話すと、「そうだよ」とカメのそばに来るA児、悲しそうな表情になったS児やT児の姿があった。

保護者のメッセージから幼児の育ちに気付く

カメが死んでしまったことをA児の母親に伝えた時、母親は戸惑いながらも、「気にしないでください。幼児ってそういうことがあって初めて駄目だったんだなあって気付きますもんね」と話をしてくれた。



その後しばらくして、A児の母親が「A児が、『みんながカメをいじめなくなった』って喜んでいました。ありがとうございました」という話を聞かせてくれた。

< 考 察 >

生き物の立場になって考える心の変容

幼児たちにとって『カメ』は『自分たち』とは違う存在で、動くおもちゃという感覚で接していたのだと感じる。しかしながら、動かなくなってしまったカメを実際に見たり、A児の「兄弟なんだよ」という話や「お母さんお父さん」という言葉を聞いたりしたことで、『カメ』が自分たちと同じように生きているということを少しでも実感できたのではないかと思われる。保護者から『みんながカメをいじめなくなった』話を聞いた後も、幼児たちがカメと遊ぶことは変わらなかった。しかし、カメが暴れないで行きたい所へ行けるように、空き箱で作ったサーキットをカメに歩き回らせていた。カメはこうした方が喜ぶだろうと、多少カメとの遊び方を考えるようになったと思う。

生き物の立場になって考えさせる教師のかかわり

カメやクワガタムシ、カブトムシのように硬くて手に持ちやすく、簡単に触ることができる生き物に対して、幼児たちはやりたいように、気持ちのまま接する。生き物に親しむという意味では、手で触れることでその感覚を味わうことができると思うが、それがエスカレートすると幼児たちにとってその生き物は生きているものではなく、動くおもちゃになってしまう。まずは教師がその生き物に対して、大切に思う気持ちをもってかかわり、また、幼児たちが「あ、自分たちと同じなんだ」「優しくしてあげるとうれしいかな」などと気付けるような機会を今後も作っていきたい。お昼のニュースで取り上げて、友達と一緒に考えていくほうが心から命の大切さを感じることができたと思う。善悪の判断がまだ不十分で、思いを行動に出し、したいことをしながら分かっていく4歳児に、「あんなに強く掴むから」とか「投げるから」「えさをやりすぎたので、水が腐ったから」などと責めても、反発して心から感じることはできないだろう。友達が悲しい思いをしていることに気付き、「自分もしちゃったな」「悪いことをしたな」と、失敗に気付き、分かっていく体験が多いほど豊かな学びにつながると思う。

保護者の気付きに、教師も共に喜び合う

カメを大切に思うA児の気持ちを保護者とともに感じ、クラスのみんなの変化をA児が喜んでいて聞いた。A児もクラスのみんなも成長した姿を保護者から教えられ、保護者と共に喜び合うことができた。

みどころ

「生き物の死」を幼児なりに受け止め、感じることは貴重な体験です。たくさんのオタマジャクシや昆虫などを飼うことで、想定できる場合もありますが、多くの場合はこの事例のように、ある日突然遭遇する緊迫した状況になります。生き物への興味・関心が「死んでいる生き物」にも同様に向けられる瞬間もありますが、この事例のようにしっかりと向き合うことで、子どもたちの感性や感情はゆさぶられて、「命」について子どもなりに考えたり思いをめぐらしたりします。また、このような貴重な体験は、保護者にも伝えて、子どもの体験や情報を共有することも必要です。